

夢は

野口武久
(詩人)

夜明けに見たのはたしかに夢

いつかきつと

と心に思ったのも夢

哀しいことがありすぎるから

苦しいことがありすぎるから

ひとは優しい心になって

夢の淵を裸足でめぐる

深い森の中をさまようように

美しい夕日の沈む海岸を見ているように

夢のような風景はどこにでもある

あこがれが静かに深くなってゆくと

やがてもどかしさが帰ってくる

哀しいことも

苦しいことも

解けて空気のように見えなくなる

時間とともに遠のいてゆくのも夢

夢が「時間」を喰っているからだ

猫のように

第72号

涇林

SAKABAYASHI

随筆特集



絵と文

へアスタイル (横から縦へ)

羽村の螢

追憶の中の父親像

秋の健康 “お腹の卒中”

詩

夢は野口武久…1

国際結婚池井優…4

生前墓高橋和島…6

絵と文 「宝塚」の芸名堂昌一…8

二〇世紀の「海彼の國」安森敏隆…9

ほろ酔い詩歌紀行日高昭二…11

伊勢田邦貴…13

内野潤子…14

宮地智子…16

杉本忠夫…18



絵と文 〇ギザリス 中西美子…20

木曾義仲と巴の来迎寺伝説 志村有弘…21

「単なる言葉で……」 志村栄守…23

家出ノススメ 桐原良光…25

絵と文 マネキン 佐川毅彦…27

猫が階段で寝ている 片岡義男…28

「キエフ美術館での展覧会に寄せて」 さかもとふさ…31

溪流釣り——夢幻のはざままで…… 新田啓造…32

甲斐国右左口村 永岡慶之助…34

睡眠時間 北上次郎…36

小説・江戸神仏歳時記(13)——新井葉師(梅照院) 郡 順史…38

表紙・グラビア：柳田・お田植えまつり

国際結婚



池井

(慶應義塾大学名誉教授)

優

教え子の結婚披露宴に出席するため、台湾を訪れた。新郎は大学ゼミナールの卒業生、日本人である。一方新婦はマレーシア国籍の台湾女性、両親はアメリカ在住、本人はイギリスの大学で勉強し、現在台湾の証券会社に勤務する才媛である。新郎は父の仕事の関係から台北アメリカンスクールで学び、日本の大学を卒業した後、日本の会社に勤務し、企業派遣でアメリカに留学、

エール大学でMBAの資格を取得し、元の会社に戻ったが、やがて転職し、台湾で勤務する内、求められて台湾の証券会社に移った。新婦とは証券アナリストの資格を得る講習会の場で知り合い、意気投合して婚約、結婚にいたったのだ。二人で話すときと新郎の両親とは英語、新婦の親戚が入るときは北京語を使うのだという。まさに国際的結婚である。

台北の由緒あるホテル、故蒋介石總統の宋美齡夫人のお声がかりで作られた円山大飯店でおこなわれた披露宴は日本のそれとはまったく異なるものであった。夕方六時の開宴と招待状にあるので十五分前に着くと、宴会場にはほとんど誰も来ていない。受付で署名し、お祝いを渡す。台湾では、お祝いは現金、それも六の数字が縁起がよいとされ、六千六百台湾元(日本円で約二万

円)を赤い封筒に入れて持っていった。服装も日本のように黒の式服に白のネクタイではない。白のネクタイは台湾ではお祝い事には使わないのだという。したがって普通の背広に赤系統のネクタイを締めて出席した。

最初予定した時間から一時間が過ぎ、七時頃になってようやく席が埋まった。台湾では招待状を出すとき返事はもらわないのが慣例だそう。日本のように返信用のはがきを同封して、出席、欠席をあらかじめチェックすることはしない。だから当日になってみないと何人くるかわからないのだ。ほぼ満席となったが、出席者の服装はバラバラ、ごく普通の背広あり、ノーネクタイあり、なかには半そでの開襟シャツ姿で出てくるひともいる。

七時十五分。新郎新婦が入場、両脇の席から花のかたちに細かくきった紙片が二人にそそがれる。「証婚人」(結婚公証人)が結婚証書を読み上げ、結婚が成立、証婚人がそのまま祝辞をスピーチする。今回の証婚人は、台湾の

有力政党親民党の副代表であった。祝辞は中国語だから日本人ゲストのため通訳によって日本語に直される。つぎは新郎の父の挨拶である。日本では披露宴の最後に両家を代表して新郎の父が感謝の辞を述べるのが普通だが、台湾では、はじめにおこなうのだ。そして日本からやってきた私の祝辞となる。

学生時代の活躍、台湾との結びつき、この国際結婚がきつとうまくいくことなど、卒業論文など具体例をだして五分ほどでまとめる。中国語への通訳に時間を考え、意識して短くした。司会者の発声で乾杯。そして披露宴が始まるのだが、台湾では主賓用のメインテーブルに新郎新婦のみならず、両親、兄弟も座る。披露宴が開始されると、もうテーブルスピーチはない。日本だと会社の上司、同僚、学生時代の友人などがエピソードを紹介したり、歌を歌ったり、なかにはマジック、踊りなど芸を披露する場合がよくあるが、台湾ではひたすら酒を飲み、つきからつきへと運ばれてくるご馳走を平らげるので

ある。

宴半ばで新郎新婦がお色直し、ここで新郎が礼の言葉述べる。日本語、北京語、英語とひとりで三ヶ国語を操るの挨拶である。隣に座っていた七十歳になるといって本省人の老人が「わたしの北京語より発音がいいですよ」と囁く。本省人とは台湾省出身者をさすが、七十歳になる台湾生まれのひとは、日本の植民地時代小学校五年まで日本語教育を受け、家庭では台湾語、北京語は国民党の時代になってから習ったので、発音には自身がないそう。

デザートを食べ終わったところで、参列者は適時に帰りはじめ。その際新郎新婦は出口に立ち飴を配ってゲストたちを見送る。日本式のスピーチにつぐスピーチ、司会者による拍手の強要、豪華な引き出物……といった結婚披露宴とはまったく異なる形式であったが、皆盛んに飲み、食べ、実に楽しんだ国際結婚式であった。

生前墓



高橋和島

(作家・郷土史家)

今年一月末、当節珍しくもない胃癌の手術を受けた。

ありふれた病気とはいえ、病名はまがまがしい癌だから、当人とすればもちろん一大事。手術に際しては冥土ゆきの覚悟を決め、それなりの準備をすることにいった。

まず遺言らしいものを書いた。中身は妻子に残す美田皆無ゆえ、財産分けに関する記載はなし。もっぱら無駄な延命治療はするとか葬式は家族だけでひっそりやってくれといった類の希望事項を並べた。

書いているうちに、落ち着かなくなつた。わたしは次男であるうえ、いま住んでいる町の生まれではない。したがつて、檀家として付き合ひのある寺はないし、墓地は購入してあつたものに入るべき墓もない。葬式のやり方だけを家人に求めておいて、後は頼むでは無責任だ。

へお経をあげてもらう寺を決め、入るべき墓づくりの手配をしておく必要があるな

と考えるに至つた。
かくして怠け者がにわかにも動き回

ことになつたのである。

まず、焼き物原料の陶土製造会社を経営する知人に、町内にある二つ寺の一つの住職へ紹介の電話を入れてもらった。

入院日まで約一週間。急がなければならぬ。その日、早速、家内を伴つて同寺へ足を運び、住職に会つて頼み込んだ。檀家の末席に加えてほしい、そのときがきたらお経をあげてほしい、生前墓を建てることにしたので戒名をもらいたい……と。

あとから周囲の人たちに訊くと、わ

たしのとつた行動はきわめて図々しいものだったようだ。というのも、町内で檀寺の決まっていない人はけっこういるらしく、そうした人たちはお寺とのつながりをつくるべく、日頃、説教会などへ頻繁に足を運んでいるとか。いきなり檀家にしてくれと頼むような礼を失するまねはしないらしい。

図々しさはこれだけでなく、その寺で葬式をあげた場合の費用や生前に戒名をもらおうとしたら幾ら払えばいいのか、といったことを訊ねるところまでいった。

住職は幸い寛容なひとで、心中苦笑をしてはいただろうが、怒ることもなく、丁寧に対応してくれ、こちらの願いごとの全てを聞き入れてくれた。

お寺が済んだので次は墓石である。新聞の折り込み広告で目をつけた石屋へ、これまた家内同伴で車を飛ばした。

生前墓をつくるひとの心境が一般的にどんなものかは知らないが、少なくともわたしはちよつぱり楽しかった。まず石屋の敷地内に置かれた商品見本

を見て回る。値段の高い上質の石を使うとそれなりの見栄えの墓ができることを知った。

死んでから入る場所の見栄えなどどうでもいいわけだが、「終の棲家」なんだから、やはり多少でも住み心地がよさそうなほうがいい。

現物の商品見本のほか、幾冊かのアルバムに収録された工事実績としての写真も見せてもらい、予算の範囲内で気に入ったデザインの墓を注文した。いわゆる洋墓というやつで発注した当人からすれば、しゃれた墓にしたつもりだった。ただし、石の品質は多分、下の上クラスかひいき目に見ても中の下クラスというところか。

こんなふうにと墓石屋とのわたりをつけておいて、わたしは入院した。で、手術をしたわけだが、痛い思い、苦しい思いをしたせいでだろう。約一カ月の病院暮らしのあと、自宅に戻ったときには、入院前に駆けずりまわった寺や墓石屋のことはすっかり忘れていた。

ある程度体調の整った退院から二カ月ほど後のことだ。家内が墓を見に行かないかと言いつ出した。彼女によると、すでに墓はできあがっており、お寺からもらった戒名も刻みこんであるという。

桜の蕾がほころび始めた春らしい日だったので、わたしは二つ返事で出かけることにした。

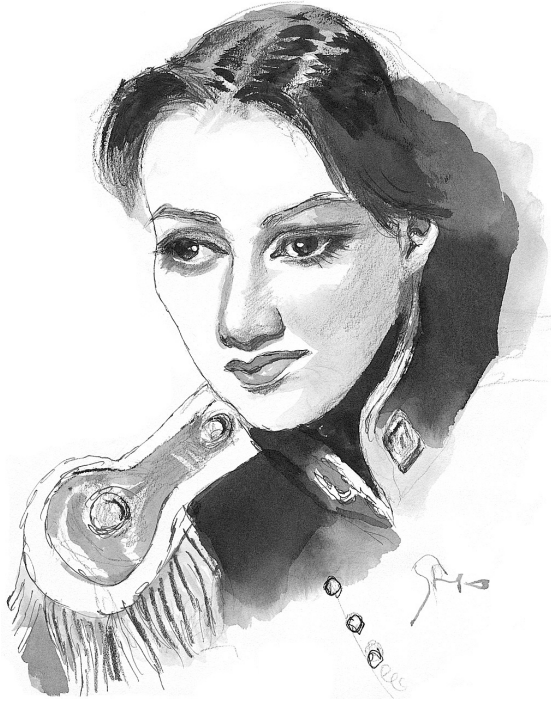
自分と家内の俗名と戒名が赤字で刻み込まれた墓の前に立ったわたしの頬は緩んでいた。デザインも石の質も思っていた以上のものとなっていたからで、できあがったばかりの家の前に立ったときのような弾んだ気持ちになったのである。

その後、墓地内の桜が満開になった頃と葉桜になった頃の二度、わたしたちは遊園地にでも出かけるような気分ですこに足を運び、しみじみと「終の棲家」を眺めた。多分、今後も気が向けば出かけることになるだろう。

ただし、二人とも今のところ、そこへ急いで入りたいとは思っていない。

「宝塚」の芸名

堂 昌 一



私は、宝塚歌劇は門外漢で、よく知りませんが、映画や芝居での、「元」「タカラ・ジェンヌ」は大ファンであります。天津乙女、越路吹雪、轟夕起子、小夜福子、乙羽信子、宮城千賀子、霧立のぼる、月丘夢路、枚挙に暇がありません。語呂も、言の葉も美しいと思います。今のタカラジェンヌの芸名は、振り仮名か、ローマ字がないと正しく読めません。真飛 聖、北翔海莉、袖希礼音、望海風斗、漣乃せいら、宙輝れいか、緒月遠麻、祐澄しゅん、宝塚では歌舞伎や新派のように、襲名は難しいのでしょうか、「歌の上手な二代目越路吹雪」だ、なんて、ちょっと「乙」ではありませんか。

二〇世紀の「海彼の國」



安 森 敏 隆

(同志社女子大学教授)

東京を中心とした近代国家を樹立した日本において、まだ「海彼の國」と呼ぶにふさわしいところが日本のなかに、ひととちただけあった。それは、

二〇世紀になったばかりの一九〇七年(明治四十年)の、ある日ある処に限局でき、遠望することができる。

コツ、コツ、コツ、コツ、コツ

と「海彼の國」を目指して歩く、五つの靴音が聞こえてくるのである。

五足の靴が五個の間をはこんで東京を出た。この人間は、皆ふわふわとして落ち着かぬ仲間だ。彼等は、面の皮も厚く無い、大胆でも無い。而も彼等をして少しも重味あり大量あるが如く見せしめしものは、その厚皮な、形の大き

い「五足の靴」である。

(「東京二六新聞」明治四十年八月七日)

しっかりと大地を踏みしめ、五人の先頭に立ち、先ずは、故郷・柳川を指す北原白秋の靴音が聞こえてくる。その後を健脚の与謝野鉄幹と木下杢太郎そして平野万里と吉井勇が前になり、後ろになりして続いて歩いていくので

ある。

北原白秋、木下杢太郎、平野万里は二十二歳、吉井勇は一歳下の二十一歳の学生であり、与謝野鉄幹のみは三十四歳の、四人を束ねる立場にあった「明星」の主幹であった。

一行五人は、一九〇七年七月二十八日に東京を発ち、厳島（広島）、赤間関（下関）、福岡、柳川、唐津、佐世保、平戸、長崎、茂木、天草、三角、島原、長洲、熊本、阿蘇、熊本、柳川と巡り、八月二十七日まで約一カ月の長期間の旅をして、三々五々東京へ帰っていった。

十年の夏、新詩社同人寛・万里・勇・正雄・白秋は九州旅行の途次長崎に一泊し、天草に渡り、大江村のカトリック寺院に目の青い神父と語った。この旅行から何を彼らはもたらしたのか。浪漫的のほしいままの夢想者であった新人、彼等は我ならぬ現実現実ならぬ空を空とし旅を旅として陶醉し

た。中にも北原白秋は「天草雅歌」を、邪宗の「鶴」を、正雄は「黒船」を、また「長崎ぶり」を、その阿蘭陀船の朱の幻想の帆と、掲せて、ほほういほほういと帰つて来た。（『明治大正誌史』）

と、北原白秋自身、後年振り返って書いている。

表向きは、九州圏に於ける雑誌「明星」の拡大作戦にあったが、その目的は「海彼の國」のキリシタン遺跡を巡ることであり、大江村のパーテルさんこと仏蘭西人の宣教師に会い、異国の文化やキリシタンのことを聞くことであつた。だが、その「五足の靴」（『東京二六新聞』掲載）の旅から、ひとりだけ取り残された男がいた。

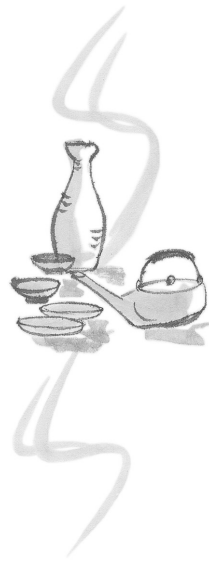
石川啄木！である！！。国崎望久太郎をして「落伍者の文学」と言わしめただけあって、浪漫主義に少し遅れて「明星」に入り、自然主義の現実暴露の悲哀にも少し遅れて小説を書こうと模索していた啄木は、この

とき、北海道にいて取り残されたのである。東京に帰ってきた啄木は、翌年の一九〇八年、その遅れを取り戻すかのごとく九州の豊後臼杵に住む一人の女弟子に恋をする。現在、『啄木全集』（筑摩書房）で見ると、その女弟子である菅原芳子へ宛てた手紙は一九〇八年六月二九日にはじまり、一九〇九年一月七日までの十二通が採録されている。そして一度も会うことはなく、

「写絵」（写真）のみの出逢いで、別れることになる。この恋に続く、同じ豊後・臼杵の地に住む平山良子（実は良太郎という男性であつた）への恋の遍歴と思わぬ破綻こそ、啄木の啄木らしい「海彼の國」への、一年遅れの出発であり、また挫折でもあつた。

「海彼の國」から帰つて来た北原白秋・木下杢太郎・吉井勇らは、さつそく「明星」から飛びだし「パンの会」を結成する。石川啄木も「明星」一〇〇号を編集し終えて、またここでも彼らに一歩遅れて「スバル」へと飛びたつていくことになるのである。

ほろ酔い詩歌紀行



日高昭二

(神奈川大学教授)

酒器のひとつに「徳利」がある。その語源は、酒がその口から出るときのトクトクという音からきたといわれる。

元の形はトクリで、トクは擬声語、リは副詞でサラリ、キリリなど語尾につく状態をあらわす接尾語、などと説明している辞書もある。

この「徳利」とならんで、わたしたちに親しいことばとして「銚子」がある。金属製で注ぎ口があり、鍋型をしていて長い柄がついている。そういうところから「長柄の銚子」とも呼ばれ

るが、この「銚子」の語源は今一つはっきりしないという。

この「銚子」とともに、よく使われるものに「猪口」があるが、この方は形が猪の口に似ているところからつけられた名前だ、爛酒の習慣ができて以後、一般的になったことばであるという。

この「銚子」や「猪口」の前となること、「瓶子」であろう。このことばについては、『古今和歌集』のなかに、こういう一首がある。

玉だれのこがめやいづらこよろぎ
の磯の浪わけおきに出でにけり

藤原敏行の歌である。歌の前に掲げられている序詞を読むと、殿上人たちが女藏人に銚子を持たせて、「后宮の御方」に酒の無心をしたのだが、何も言うてこないの、一体われわれの銚子はどこに行ってしまったのかと、女藏人に言い送ったという説明がある。この一首でお面白いのは、「玉だれのこがめ」

ということばであろう。つまり小瓶(瓶子)を小亀に見立てたことばで、それとあわせるように「おきに出でにけり」とあるのが、后宮の前までも小瓶を持って出たということになるわけであろう。瓶子が小亀のように姿が見えなくなっているという表現など、じつにユーモラスで、酒を無心している酒飲みたちの心がよく示されているというべきであらう。

こういう酒飲みたちの心理の、行き着く先はといえば、いっそのこと酒壺そのものになってしまいたいということにもなるうか。大著『酒』の著者である住江金之博士によれば、死んだら陶器製造所の近くに葬ってくれ、そしてたら百年後には土となって酒壺の材料となることもできるから、という遺言を残した人があったとか。また、かつて大阪の千日前には、作者は不明ながら、次のような石碑が建っていたともいう。それについては博士は、男の歌とともに、女房の返歌も合わせて紹介してくれている。

われ死なば備前の土となしてたべ
徳利となりて永くさかえん

望なら備前の土になしもせんもし
すり鉢になつたときには

じつは「徳利」の語源には、もう一つあって、備前焼きは安価で堅牢であることから、文字どおり「徳利」と呼ばれたという説があるのだという。そうした「徳利」と「備前」のかかわりを合わせ考えてみると、この歌の興趣が一層増してくる。

酒にまつわる詩歌は、それを飲んでいる人の生活の風景までもよく表してくる。竹筒で飲む場面や茶碗酒などもそうだが、また角樽から直接枡に受けて飲む場面など、いろいろある。そうした風景に酒器のさまざまな種類や形が重なってくることで、酒の歌はさらに陰影が深くなるともいえよう。たとえば「白鳥徳利」など、例の白釉葉がかかっているもので、頸が長

くて白鳥のような形に似ているところから付けられた名前であるが、なかなか優雅な呼び名である。それと逆に、私たちに親しい徳利の名前もある。

三合の酒飲みあげてもろともに
朝寝して居る貧乏徳利

酒豪で名高い狂歌師醉起亭天の広丸の歌だという。「貧乏徳利」は、その多くは一升入りのもので、酒屋と台所をいつも往復するところからつけられたともいうが、それと「もろともに朝寝して居る」風景とは、見方によっては、じつに雅趣があるともいえよう。

徳利の向うは夜霧、大いなる闇
よしとして秋の酒酌む

佐佐木幸綱の一首である。この徳利は、備前であろうか、それとも青磁であろうか。頸の長いものか、白鳥型か。その形の向こうに、現代人の魂のありかを見据えた一首である。

ヘアスタイル (横から縦へ) 伊勢田 邦貴



今、私は戦後の雑誌で髪形を見ているが、左右に拡がった奇妙なスタイルだが、当時はおかしくなかった筈だ。流行だから当然その後変化してきて横拡がりの上に集中して所謂アップ気味、耳から下は髪が見えない。次に左右に少し伸びてきたが、大体の印象としては短い。(何時場合でも例外があり個人差は別として) そして皆さんお馴染みの現代のスタイルである。毎日見ているからどうということもないが横から縦長に変化してきたようなものである。歴史はくりかえすというが、戦国時代に共通するものがある。

男も然り中で中・高年の前髪スタイルがよく目につくが、おかしくないから不思議だ。

羽村の螢



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

今年の夏、久々に螢を見ることができた。青梅線の羽村に住む下の娘の家から、程近い多摩川でも螢が飛ぶというので、泊りがけで連れていってもらった。

羽村の螢を見るのはこれが二度目で、初めに見たのは、二十年程昔になる。

その時は、丁度春に婚約した下の娘が相手の青年に、お母さんも一緒に螢見にいらつしやいと誘われて、娘の車で出かけたのだが、これから娘の住む羽村町はどんな処なのか、私は不安と

安堵の入りまじった気持ちで、娘の婚家へ向かったのだった。

夏のことで夕方まだ明るいうちに出て、途中で食事をしていこうと青梅街道を走り出した。

娘は当時中学の教員をしていて、車で通学していたので運転は馴れていた。

しかし、婚家には病床の舅や姑と姑の姉と独身の義姉が居るといふ条件の中に自分が飛び込めるかどうかという重い気持ちを持っていたと思う。

同居はせずに、母屋の隣りに新居を

建てて迎えてくれることにはなっていたが、私も只安心するという気持ちではなかった。

しかし相手の青年が実に人柄のよい人で、娘の父親と同じ職業であったことなどが二人を結びつけたのだった。

私も相手の家に初めて行くというのが、螢を見るところより先行していたのは確かだった。途中のファミリーレストランに入り夕食を注文した。それがなかなか料理が来ない、そういう時にかぎって簡単な料理なのに出てこ

ない。時間はどんどんとたつ、ようやく運ばれてきて食事が終る頃は、もうあたりは真暗になってしまった。

私はそんな時ははらはらどきどきするのになんか決して狼狽えたりしない。

約束の時間は迫り車は暗くなつた青梅街道をひた走りに走った。ゆけどもゆけども、羽村は遠かった。この娘を溺愛していた夫は、そんな東京のチベットのような所に住むのかと嘆いたものだった。

街の灯も少しづつ少なくなり、山が

近くなると空も広くなり次第に淋しい道になってくる。もの云う元氣もなく黙って車を運転する娘の隣りに座っていた。

ようやく辿りついた家は、街の広い道の角にあつて庭のある家のようにだつた。青年と姑は心配して車寄せの前で待つていてくれた。

そのまますぐ螢を見に出かけるといふ。

青年の車で山の方へ向かう。全く知らない土地で、大分走つた所で一度止まり、「この辺にもいたんだけれど」と降り立つと、豚を飼つている農家の近くでその匂いがした。

そこを離れて又細い山道を登り車を止めると息づまるような真暗闇である。

人の顔も姿も見えない。少しずつ歩いてゆくと、そこには青い光がいくつも漂つていた。

光つたり消えたりしながら螢は近く来て又遠のく。私たちの前には男の人が二、三人いてどうも網でとりに来てゐるらしい。

自然保護地区で勿論それは許されない場所と思うのに、がやがやしながら光の近づくのを待つてゐる氣配がした。流れもあるらしいのだがそれも音のみで何も見えない。何か切羽つまつたような氣持ちで、私は闇の中に立ちつくしてゐた。

その日は青年の家に戻り手作りのまぜずしをいただいで帰つてきた。自宅についたのは夜半十二時になつてゐた。

それから二十年を経て、娘は今三人の子供の母親である。高校生の長女、中学生の長男、小学生の次男と育ち盛りの勢いの中で立ち働いてゐる。次男の誕生の時に務めは一応辞めた。次々に生まれて来る孫のために、私の羽村通いは数しれずとなり、亡くなつた夫も孫のためにどれだけチベット通ひしたことだろう。

青梅街道より羽村に近い新青梅街道を通り今回の二度目の螢見物に連れていつてもらつたのはお盆の前々日のことである。

参加したのは私と姑と義姉と娘夫婦

に小学生の次男坊である。蒸し暑く、赤い月が出てゐる中、車で多摩川の近くへゆき、土手に登つてしばらく行くと、一処川が分かれて流れの急な場所に螢がゐるといふ。目を凝らすと一匹、又一匹草むらからふわりと流れて近くまで飛んでくる。私は一昨年亡くなつた夫のことを娘は父のことをやはり思い出してゐた。

二十年前の螢より光は乏しい氣がしたが心は穏やかで懐しく、もの哀しい螢であつた。

翌日、娘に送られて電車で帰路についた。丁度お盆の前日で途中の夫の墓のあるお寺に娘とお参りに行つた。娘はタオルで墓石を丁寧に拭く。私の生家ではその様な風習はなかつたが、羽村の家は墓を大切に扱うらしい。

夫の墓参りを済ませて食事してから娘に別れて乗つた帰りのタクシーは、モータールトの曲を流してゐる個人タクシーだつた。夫が朝夕浴びる程聴いてゐたモータールトの調べに包まれて二度目の螢見物は終わったのだつた。

追憶の中の父親像



宮地智子
(詩人)

司馬遼太郎は作品『花神』のなかで、追憶というものの不思議さを、シーボルトと、その娘イネとの三十年ぶりの再会の場面を描くことよって極めて印象的に語っている。(人間の脳裏の追憶というものは、事実として記憶されるよりも、詩として記憶されるのかもしれない。)

シーボルトが三十年の空白を経て再会したかつての妻お滝は、シーボルト

が去って後、他の男と同棲したり、結婚して男の子を生んだりしており、シーボルトもまた、母国で再婚し、子供を儲けている。シーボルトとお滝の間に生まれたイネは現実の父親を知らない。シーボルトの教え子達によって医師として立派に生長を遂げたイネに再会したことは、父親であるシーボルトにとっては大きな喜びではあったが、娘のイネにとっては悲劇的な事件であった。

イネは二十代のシーボルトの絵像を父の面影として、それを永遠の父親像として心に抱いていたのだから、すっかり年老いた現実の父親を目の前にした時、イネは詩を失ったと言える。イネは「会わねばよかったです。」と村田蔵六に訴えるのである。司馬遼太郎は、事実と歳月と追憶と詩との関係をこのようにみごとに洞察している。

さて今私は、十七年前に亡くなった私自身の父親を思い出している。明治三十八年生まれ父は、物心ついた頃には既に両親によって創業された塗料問屋の商店主として将来の生きるべき道が宿命づけられていた。故郷の村を引き払って東京に進出した父の両親は、家業を盛り立てるために五人の子供達を住み込みの小僧さんと同様、厳しく仕込んだという。長男であった私の父には特に厳しかったらしい。「おやじにはよく殴られたよ。でも今思うとそれが有難い。おふくろは、にいちゃんにいちやんで可愛がるだけだから、そんなのはすぐ忘れるんだ。」他界してから

久しい両親の思い出を父は何度かそのように口にした。ある時、その父が風邪で寝込んだことがあった。私が小学校高学年の頃だったろうか。両親の寝室であり、客間でもあった十畳の和室の障子がぼんやりと明るかった。私が父の寝ている蒲団をそつと覗くと、「えーん、えーん。」と声を挙げて泣いている。

多分私が行ったのでわざと声を出したのだろう。父にはそんな素直な気があった。「お母さんが恋しいよ。」とも言った。普段の父は、やれ無駄な電気は消せ、やれ御飯は残すな、と口やかましくて、どちらかと言うと余り近寄りたくない存在だった。だからこんな父の姿を見た私の心には父に対するいとおしむ気持ちも泉のように湧き出るので五十年経った今でもよく憶えている。

けれど私が思春期になると私は父に何かと反発をしたのでかなり険悪な関係になっていた。恐らく当時、私は父を随分憎んでいたと思う。けれどその当時の生々しい感情を今ではすっかり忘れてしまっているのは不思議で

ある。歲月の中で醸された記憶は生々しい感情をみごとに消し去り、詩を形づくるのであるらしい。現在私が亡くなった父をイメージに描く時、それは毎朝神棚に向かって拝礼し、仏壇の前に座って読経する姿である。けれど記憶の壁を丹念に探ってみると、毎日のように繰り返される父と母との諍い、子供の意見を頭から否定し押さえつける父の頑なな態度などがあるの。また事実である。もし、そういう、ありのままの父が今、あの世から戻って来て私の目の前に立ったら、恐らく私はシーボルトに再会した時のイネのように、「会わねばよかった」と呟くであろう。

私が追憶の中の父に会いたい時、夏目漱石の『道草』を開く。そこには死んだ私の父がいるからである。私の父は『道草』の主人公健三のようなインテリではないが、私は読み進めるうちに、いつのまにか健三と私の父を重ね合わせているの気がつくのである。

言い換えると、私が自分自身の父親像を、小説の中の主人公のように追憶しているということに他ならない。さらに言えば、漱石という作家の描くひとり男のイメージが、私の描く私自身の父親のイメージを喚起させてくれるのだとも言える。どのページを開いてもよい。そこには家族を抱え、人間関係に苦しむひとりの男が生々生々と呼吸しているのである。例えば、「人間の運命は中々片付かないもんだな。」と言う主人公の言葉に、細君が「それが何うしたの。」と切り返す場面がある。このように噛み合わない夫婦の会話が、ある懐かしさと慕わしさを伴って、あたかも死んだ私の両親の会話のように聞こえてくるのである。さまざま人間の側面を持つひとりの男としての父親を追憶する時、私はやはり神棚に拝礼し、仏壇に向かって手を合わせる父の姿を思い描くのである。そうして、そのような父親を私は誇らしく思うのである。

秋の健康

“お腹の卒中”



杉本忠夫

虎の門病院
内分泌代謝科嘱託医

秋は楽しい行楽シーズンで、またお祭りなど色々な催しもたくさん行われます。以前は楽しい旅行や行事中に、食中毒のニュースが飛び込むことがよくありました。しかし、近頃は衛生管理が行き届き食中毒は激減しています。

ところで、ライフスタイルが欧米化するなかで病気も欧米型になってきています。消化器系の病気の罹病頻度も変わり、欧米型の大腸ポリープ・大腸

癌が多くみられるようになりました。

今年、日本の元総理が大腸の動脈血栓症（お腹の卒中）のため大手術を受けられ、残念なことに永眠されたことはまだ記憶に新しいところです。

お腹の卒中（血栓症）はあまり知られていません。この病気は日本では稀な疾患で、腸管膜動脈血栓症と呼ばれております。腸に血液を送っている腸管動脈の枝が詰まって腸管が壊死に

陥る（腐る）病気です。欧米では悪い病気としてよく知られています。

ところで、腸管膜とはどんな膜でしょう。この膜はセロファンのような薄い透明な大きな膜で、腸管を覆い、長い腸管が絡まないようにしています。そして、この膜の中を走る血管が腸管膜動脈です。

腸管膜動脈は臍の上と下の高さで腹部大動脈から分かれた、上腸管膜動脈と下腸管膜動脈の二本からなります。上腸管膜動脈は小腸と大腸の上部を、下腸管膜動脈は残りの小腸大腸の下部を循環しています。この動脈が腸管膜に沿って枝分かれし、これらの枝が分担して長い腸管を養っています。つまり、腸管膜動脈は腸管膜の中を木の根のように広がり枝分かれしながら腸管に血液を送っています。

不幸にも、腸管膜動脈の一本の枝がつまるとその部分の腸の血行が途絶え酸素も栄養分も届かず、腸管が壊死に陥ります。

このような事態（血栓）がお腹の中